

朝鮮通信使と大垣

朝鮮通信使

朝鮮通信使とは、「鎖国」を行っていた江戸時代の日本において、政治・経済・文化の交流使節として正式訪問していた外交使節団です。「通信」とは信義を通わずとあり、使節の第一の目的は朝鮮国王から徳川将軍への書簡をもたらし、返書を受領することでした。江戸時代をとおして12回来日し、初期3回は豊臣秀吉による朝鮮出兵の戦後処理としての使節でしたが、4回目の1636年(寛永13年)からは、正式名称も「通信使」となりました。そのうち1811年(文化8年)まで、おもに将軍の代替りを祝して、朝鮮国王から徳川将軍への一大使節団が、沿道各地で盛大なもてなしを受けながら日本を横断して往復したのです。

使節の編成

使節のトップは正使・副使・従事官で、あわせて「三使」と呼ばれます。さらに、通訳はもちろん、書家や学者・画家・医師、また旗持や楽隊、曲馬手や料理人・水夫など、総勢約500人にのぼります。すべて男性で、そのうち100人ほどが大坂で船とともに残留し、江戸まで行ったのは400人ほどでした。使節のメンバーが乗る輿や馬の回りには何人もの日本人がつき従い、一行を警護する対馬藩の者、宿泊・休憩を世話する各地の大名たちの送り迎えなどをふくめると、行列全体の数は何千人にもふくれあがったのです。

宿泊地・大垣

江戸時代に来日した12回のうち、伏見で将軍秀忠に謁見した1617年(元和3年)と、対馬での応接となった1811年(文化8年)をのぞいて、使節は美濃路を10回、往復を考えると20回通っていることとなります。その旅程はほぼ同じで、美濃国内では、今須(関ヶ原町)で昼食、大垣で宿泊、翌日は起(尾西市)で昼食、名古屋で宿泊と、一泊二日で美濃路を通過していきました。大垣は使節が必ず泊まる地であり、宿所となったのは全昌寺(大垣市船町)などです。

大垣藩と通信使

使節を迎える各地では、接待にたいへん気を配りましたが、大垣藩も随分苦労したようです。大人数のための宿所や街道の整備、食料・道具・人馬の用意にはじまり、出迎えや見送り、到着時の挨拶など、経費も労力も莫大でした。群集する見物人にも配慮しなければならず、見物の場での作法や、集まる時刻についての注意も出されています。使節が泊まる全昌寺への出入りには、あらかじめ役所から渡された札を提示することが定められていましたが、使節見たさに規制をかいぐって入り込む人も多かったことが、当時の記録に記されています。

朝鮮通信使に関する記録は、1607年～1811年までの間に、江戸幕府の招請により朝鮮国から日本国へ派遣された外交使節団に関する資料で、両国の歴史的経験に裏付けられた平和的・知的遺産であり、恒久的な平和共存関係と異文化尊重を志向する人類共通の課題を解決するものとして、平成29年ユネスコ世界の記憶に登録されました。

ちょうせんやま 竹島町の朝鮮山車

「鎖国」であった当時、異国情緒あふれる一大行列は大変珍しく、人々にも影響を与えました。竹島町にかつてあった朝鮮山車もそのひとつで、朝鮮通信使の行列を模した練り物でした。「清道」の旗を先頭に、笛・太鼓・羯鼓・胡弓などの楽隊と、山車に乗った「大將官」の人形。その脇には小姓がひかえ、「朝鮮王 竹嶋町」の旗がつかまきました。八幡宮の祭礼にひきだされた各町の軸の中でも、ひときわ目をひいたといえます。明治初期に、現在の「榊軸」にかえられましたが、朝鮮山車の豪華な刺繍をほどこした衣装や楽器、「大將官」の人形や旗は、岐阜県重要有形民俗文化財として今も残されています。

